

英米文化学会 第 169 回例会のお知らせ

(例会担当理事：河内裕二)

日時：2023 年 3 月 11 日 (土) 午後 3 時 00 分～

午後 2 時 30 分受付開始

場所：武蔵大学江古田キャンパス (東京都練馬区豊玉上 1-26-1)

8 号館 8501 教室 & Zoom\*

\*武蔵大学江古田キャンパスを会場として使用し、同時にオンライン(Zoom)のよるハイフレックス開催の予定。

非会員で Zoom 参加を希望される方は、お名前とご所属を明記し参加希望のメールを事務局 MichioTajima(at)SES-online.jp (注：@を(at)に書き換えてあります) までお送りください。ミーティング ID とパスコードをお伝えします。

開会挨拶

(3 : 00 -)

英米文化学会理事長 曾村充利 (法政大学)

研究発表

1. コンラッド作品の「マレーもの」に関する共通要素について

(3 : 10 - 3 : 50)

発表 渡辺 浩 (就実大学)

司会 塚田英博 (日本大学)

2. テネシー・ウィリアムズの詩的想像力—“Kicks”と『欲望という名の電車』をめぐって

(4 : 10 - 4 : 50)

発表 古木圭子 (奈良大学)

司会 河内裕二 (尚美学園大学)

閉会挨拶

(4:50-)

英米文化学会副会長・事務局長 田嶋倫雄 (日本大学)

臨時総会

(4:55-)

研究発表抄録

1. コンラッド作品の「マレーもの」に関する共通要素について

渡辺 浩 (就実大学)

コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) の初期の物語の中に、マレー地方を舞台とした一連の作品群「マレーもの」がある。処女作の長編『オールメイヤーの阿房宮』 (*Almayer's Folly*, 1895) をはじめ第二作『島の流れ者』 (*An Outcast of the Islands*, 1896)、それに続く短編「カレイン」 ("Karain: A Memory", 1897) や「潟」 ("The Lagoon", 1897) もこの地域が舞台となっている。そして名作『ロード・ジム』 (*Lord Jim*, 1900) に至って、構成・内容ともにその頂点に達したといえる。処女作がある程度評価されたことは、作家が当時 37 歳でポーランド出身であったことを考慮すると、幸運なスタートであった。すでにこの作品においても部分的には「マレーもの」としての完成された特色が備わっている。本発表では、上記各作品を比較することで、「マレーもの」に共通する特色を明らかにし、さらに作品のプロトタイプと考えられる要素について考察する。

2. テネシー・ウィリアムズの詩的想像力—“Kicks”と『欲望という名の電車』をめぐって

古木 圭子 (奈良大学)

1970 年代に執筆され、2021 年に発表されたテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams, 1911-1983) の詩 “Kicks” は、『欲望という名の電車』 (1947) のブランチが、レイプ事件の「被害者」として、スタンレーを新たに告発するという内容を含んでいる。さらに本作には、進化論の議論を白熱させた「スコープス」裁判を担当した弁護士クラレンス・ダロウ (Clarence Darrow) の名が挙げられ、ブランチが人間の「進化」について論じながら、スタンレーの野蛮さを批判する『欲望』

の場面を想起させるが、レイプという問題を扱っているという点において、同じくダロウが関わった「マッシー事件」の裁判との関わりも無視はできない。以上のような点を踏まえ本発表では、1970年代に、詩という形式において、ブランチとスタンリーの関係に新たな対立構造を見出そうとするウィリアムズの意図を探ることとする。